新しい「帝国」概念の有効性
――ハートとネグリの『帝国』をめぐって――

植村　邦彦

はじめに

一つの妖怪が世界をうろついている。「帝国」という妖怪が。すでに1997年には、極東の片隅でもこう言われていた。「帝国の到来をめぐる予言が今日ほどさかんだったことはない。しかもそれは、一地域における帝国の誕生ではなく、世界帝国とも言うべきものの出現である(1)」。

この「世界帝国」の表象について、『帝国とは何か』の編者の一人である増田一夫は、次のように説明している。「われわれの目前で成立しつつあるかもしれないとされる帝国は、武力制覇によって成立するのでもなく、中心的な核もなく、あくまで匿名であり続けると言われている。このイメージは政治よりも経済、経済よりもコミュニケーションの分野で実際に起こっている事態を想起させる。ピラミッドや樹［ツリー］状の組織ではなく、無限に接続し合い絡み合うウェブもしくはネットワーク。あらゆる地点からのランダム・アクセスの可能性を備えた開かれたシステム。根茎［リゾーム］状の組織。これはドゥルーズとガタリの著作『資本主義と分裂症』において提示されたイメージにほかならない(2)」。

そのように述べたうえで、増田は次のように結論を保留している。「そして『帝国』。その到来の予感は、一部の人々の期待を代弁しているにすぎないのかもしれない。……しかし『帝国』は、たんに、国民国家が弱体化してゆくなか、その崩壊の後に来る事態を『混沌』と呼ぶのを忌避して用いられる名にすぎないのかもしれない(3)」。

このような叙述からわかるように、最近現れた「帝国」という言説は、イマニュエル・ウォーラーステインによって提起された資本主義「世界システム」論やその上部構造としての「インターステイト・システム」論に取って代わる、新しい世界認識の概念として論じられているのであって、従来の「帝国主義」論や「帝国主義の問題を『意識』に即して見ること(4)」をテーマとする「帝国意識」論とは問題関心が基本的に異なると考えるべきであろう。

本論文は、このような意味での「帝国」論の最新の成果であり、2000年にアメリカで出版されるとすぐに大きな話題を呼んだマイケル・ハートとアントニオ・ネグリの共著『帝国(5)』を取り上げ、その内容を紹介したうえで、その理論的な有効性について考えようとするものである。

１．『帝国』の問題設定と編別構成

『帝国』は500頁近い大著であるが、ハートとネグリはその「序文」で、1990年代以降、

とりわけソ連の崩壊以後のグローバリゼーションの展開とかかわらせて、次のような世界認識を示している。

「グローバルな市場とグローバルな生産循環に伴って、グローバルな秩序、支配の新しい論理と構造――要するに主権の新しい形態が出現した。帝国とは、これらのグローバルな交換を効果的に規制する政治的主体であり、世界を統治する主権である。……われわれの基本的仮説は、主権は、単一の支配の論理の下に統合された一連の国民的および超国民的supranational諸組織体から構成される、新しい形態をまとった、ということである。主権のこの新しいグローバルな形態が、われわれの言う帝国である」（pp.xi-xii）。

ハートとネグリが「帝国」という言葉で表現しようとするものは、したがって第一に、19世紀以来の「帝国主義」とは異なる新しい現象であり、20世紀末以降のグローバリゼーションと呼ばれる状況に対応して出現しつつある「政治的主体＝主権」なのである。

「国民国家の主権が衰退しつつあること、国民国家が経済的・文化的交換を調整する能力をなくしていることが、実際、帝国成立の主な徴候の一つである。国民国家の主権は、近代を通してヨーロッパ諸列強が構築した帝国主義の礎石であった。しかし、『帝国』というのは『帝国主義』とはまったく別のものである。……帝国主義とは実際に自らの境界線を越えるヨーロッパの国民国家の主権の拡大であった。……帝国主義とは対照的に、帝国は権力の領土的な中心を確立しないし、固定した境界線や障壁に依拠しない。開かれた拡大しつつあるフロンティアの内部でグローバルな領域全体をしだいに併合するのは、脱中心化され脱領土化しつつある支配装置である。帝国は、指令の変調的ネットワークを通して、ハイブリッドなアンデンティティ、柔軟なヒエラルキー、多元的な交換をマネージする。帝国主義的な世界地図の明確な国民的色分けは、帝国のグローバルな虹へと溶け込み混ざり合っている」（pp.xii-xiii）。

しかしながら、ハートとネグリが言う「帝国」は、たんなる政治的概念ではない。それは、人間の社会生活全体を支配し規制するものという意味で、フーコーの言う「生－権力bio-pouvoir[(6)]」、つまり「揺りかごから墓場まで」の人間の「生活＝生命」全体に対して行使される権力の一形態でもある。言い換えれば、「帝国」はグローバルな「福祉国家＝管理社会」でもあるのだ。

「帝国の概念は基本的に境界線の欠如によって特徴づけられる。帝国の支配には限界がない。第一に何よりも、帝国の概念は、空間的全体性を効果的に包括する、すなわち現実に『文明』世界全体を支配する体制regimeを想定している。……第二に、帝国の概念は、征服に由来する歴史的体制としてではなく、むしろ歴史を効果的に一時停止にし、そのことによって現状を永遠に固定する一つの秩序として示される。……第三に、帝国の支配は、社会的世界の深奥にまで達する社会秩序のあらゆる音域を操作する。帝国は領土と人口を管理するだけでなく、まさに自分が住む世界そのものを創造する。人間の相互行為を規制するだけでなく、じかに人間本性を支配しようとする。帝国の支配対象は社会生活全体であり、こうして帝国は生－権力biopowerのパラダイム的形態をなす。最後に［第四に］、

帝国の実践はいつも血にまみれているけれども、帝国の概念はつねに平和に捧げられている――歴史の外部での永遠なる普遍的な平和に」（pp.xiv-xv）。

このように、新しいグローバルな「主権の形態」であると同時に「福祉＝管理体制」でもある「帝国」を問題にする際のハートとネグリの基本的視点は、あくまでもそれを歴史的存在としてとらえるということにある。つまり、一定の条件の中で歴史的に成立し、また歴史的に終焉を迎えるものとしてとらえるということである。

「われわれの政治的課題は、たんにこれらの［帝国成立］過程に抵抗することではなく、それらを認識し、それらを新しい目的＝終末endsに転送することである。帝国を維持する群衆multitudeの創造的力は、対抗帝国counter-Empire、つまりグローバルなフローと交換のオルタナティヴな政治的組織を自律的に構築することもできる。帝国と争って打倒する闘争も、真のオルタナティヴを構築する闘争も、こうして帝国領域自体の上で生じるだろう――実際そのような新しい闘争はすでに出現し始めている。これらの闘争やもっと多くの同様な闘争を通して、群衆は新しい民主主義の諸形態と新しい構成的権力を発明しなければならないだろう。それがいつか帝国を通って帝国を超えたところにわれわれを導くだろう」（p.xv）。

このような問題意識に基づく『帝国』は、次のような全四部の編別構成をもつ。第１部「現在の政治的構成」、第２部「主権の変遷」、第３部「生産の変遷」、第４部「帝国の衰退と没落」。なお第２部と第３部の間には、第４部を先取りする形で「間奏曲　対抗帝国」が挟み込まれている。

第１部では、「序文」で示唆された本書全体の枠組みが改めて詳しく提示される。

第１章「世界秩序」では、第二次世界大戦後の「法律的形成体としての世界秩序」である「国際連合」が、「諸条約によって規定された国際的権利の枠組み」という現実的基盤と「真の超国民的中心」という理念との間のアポリアを孕みながら、その「二義的な諸経験のなかで、帝国の法律的概念が形を取り始めた」（p.6）という認識が示され、「例外状況を支配する法律的権力と警察力を配置する能力が、権威の帝国的モデルを規定する二大座標である」（p.17）ことが論じられる。ここで著者たちが想定しているのは、言うまでもなく湾岸戦争以後の政治的・軍事的状況である。ハートとネグリは、「警察権は普遍的諸価値［＝正義］によって正当化される」（p.18）のであり、「一つのグローバルな秩序、一つの正義、一つの権利が、依然としてヴァーチャルであるにもかかわらず実際にわれわれに適用される」（p.19）と述べているが、重要なのは「ヴァーチャル」なものの実在性という認識であろう。たとえば、「帝国は今日、生産的ネットワークのグローバリゼーションを支え、すべての権力諸関係をその世界秩序の内部に囲い込もうとしてその広範な網を投じる中心として出現しつつあるが――しかし同時に、その秩序を脅かす新しい野蛮人と新しい反乱奴隷に対して、強力な警察機能を配置している」（p.20）という文章は、2001年のアフガニスタンや2002年のイラクに対する「正義」の名の下でのアメリカの対応を思い浮かべれば、きわめてアクチュアリティのあるものとして理解できるはずである。

第２章「生－政治的biopolitical生産」は、「管理社会における生－権力biopower」のあり方を素描するものだが、「この権力の最高の機能は、生を幾重にも備給することであり、その主要課題は、生を管理することである。生－権力とは、権力に直接かかっているのが生それ自体の生産と再生産であるような状況を示すものである」(p.24)。ここでは同時に、「剰余価値の生産において以前には集団的工場労働者の労働力が占めていた中心的役割を、今日ではますます知的・非物質的・コミュニケーション的労働力が満たしている」(p.29)ことが強調される。したがって、「帝国はまさにハイテク機械の形態で現れる。それはヴァーチャルであり、周辺的出来事を統制するために建造され、システムを支配し、（もっとも進んだロボット生産技術と一致して）必要なときにはシステムの故障に介入するように組織されている」(p.39)。

第３章「帝国内部のオルタナティヴ」で強調されるのは、反グローバリゼーションの地域主義や左翼ナショナリズムは「グローバリゼーション」に対するオルタナティヴたりえない、ということである。問題なのはグローバリゼーションそれ自体ではなく、その特定の形態なのだ。「敵は、われわれが帝国と呼ぶグローバルな諸関係の特定の体制regimeである。……真のオルタナティヴと解放のための潜在力は、帝国の内部に存在する」(pp.45-6)。ハートとネグリがこのような意味での「真のオルタナティヴ」とみなすのは、「グローバリゼーションの生産的・創造的主体性という多元的群衆」(p.60)であり、著者たちは、この「闘争の新しい姿と新しい主体性が、出来事の様々な重大局面、普遍的ノマディズム、諸個人と諸人民の一般的な混合と混淆、帝国の生－政治的機械の技術的変態の中で生み出されている。……群衆の脱領土化する権力は、帝国を維持する生産力であると同時に、帝国の破壊を呼び込み必然化する力である」(p.61)と見ている。だから、「今日では宣言、つまり政治的言説は、スピノザが予言した機能、群衆を組織する潜在的願望の機能を果たそうとすべきである」(p.66)ということになる。

第２部以下では、第１部で輪郭を描かれた諸問題が、その成立過程にまで遡って歴史的に位置づけられ、さらに深く掘り下げられている。すなわち、第２部「主権の変遷」は、第１部第１章で素描された「世界秩序」が、17世紀以降の近代史においてどのようにして成立してきたかを論じるものであり、第３部「生産の変遷」では、第１部第２章で示された「生－政治的生産」の成立過程が、「世界市場の完全実現に伴うグローバルな管理社会の確立」の歴史として論じられる。最後に、第４部「帝国の衰退と没落」では、第１部第３章で示唆された「帝国内部のオルタナティヴ」が、成立しつつある「世界空間のヴァーチャリティ」の二義性に即して論じられることになる。

本書は、このように波紋が同心円的に広がっていくような、独特な展開の構造をもっていることがわかる。以下では、ほぼこの展開に即しながらも、ハートとネグリの主張の問題点に焦点を当てる形で、本書の意義を考えていくことにしたい。

２．「帝国」とアメリカの両義性

前節で見たように、超国民的な単一の世界秩序としての「帝国」がすでに出現している、というのが『帝国』の世界認識であった。しかし、一読してすぐに気づくのは、その「帝国」におけるアメリカ合衆国の位置づけが両義的だということである。「帝国には中心はない」という主張が繰り返される一方で、アメリカが「帝国」そのものであるかのような叙述も繰り返し現れるからである。

アメリカ合衆国の位置について、ハートとネグリは最初にこう断っている。

「合衆国は帝国主義的プロジェクトの中心を形成していないし、今日では実際どの国民国家もそうなりえない。帝国主義は終わった。どの国民も、近代ヨーロッパ諸国民がそうだったような仕方で世界のリーダーにはならない。／合衆国は確かに帝国における特権的立場を占めているが、この特権はかつてのヨーロッパ帝国主義列強との類似性にではなく、違いに由来する。……権力がネットワーク状に効果的に分配された、フロンティアを拡大しつつある開かれた新しい帝国。……この帝国の理念が合衆国の憲法constitutionの歴史を通して生き残り成熟し、いまや完成形態でグローバルな規模において出現したのである」（pp.xiii-xiv）。

この引用の後半部分からわかるように、現に存在する「帝国」の成立は、明示的にアメリカ合衆国の「憲法＝政治体制constitution史」の中に位置づけられている。その意味では、「帝国」は明らかに「アメリカ帝国」の発展形態だとされているのである。

「ネットワーク状に拡張する権力としての主権の観念は、［アメリカ合衆国の］民主的共和国の原理を帝国の観念にリンクさせるちょうつがいの上でバランスを取っている。帝国は、普遍的な共和国、つまり境界のない包括的な構築物として構造化された諸権力と対抗諸権力のネットワーク、としてのみ想定することができる。この帝国の拡張は、帝国主義とも、征服・略奪・ジェノサイド・植民地化・奴隷制のためにデザインされた国家組織体とも何の関係もない。そのような帝国主義に対抗して、帝国はネットワーク権力のモデルを拡大し強化する」（pp.166-7）。

ここでハートとネグリが「ネットワーク権力のモデル」と呼んでいるものこそ、「アメリカ的自由」にほかならない。彼らによれば、「開かれたフロンティア」が合衆国政治体制史の第１段階をなし、モンロー・ドクトリンの時代の「帝国的空間の閉鎖」がその第２段階をなす。ただし、アメリカ合衆国の参加なしに成立した国際連盟は、それ自体が「ネットワーク権力の国際的拡張計画」だと見なされている。さらに、「冷戦下での帝国主義的軍事介入」としての「アメリカ帝国主義」がその第３段階をなし、そして最後に、「冷戦後の新しい型のヘゲモニー的イニシアティヴ」が、その第４段階＝現段階なのである。つまり、「帝国のプロジェクト、ネットワーク権力のグローバルなプロジェクトが、合衆国憲法＝政治体制史の第４段階あるいは第４体制を画する。……合衆国が初めてこの権力を完全形態で行使したのが湾岸戦争だった。……湾岸戦争は実際に新しい世界秩序の誕生を告げるものだった」（p.180）。要するに、「帝国の現代的観念は合衆国内部の構成プロジ

ェクトの拡張を通して生まれた」(p.182)ものにほかならないのである。

しかしながら、ハートとネグリは、アントニオ・グラムシやハナ・アーレントなどのヨーロッパ人によるアメリカ論に言及しながら、「アメリカ帝国」という表象をきっぱりと否定する。

「アメリカ帝国をユートピアの埋め合わせと考えるのは、完全に幻想である。何よりまず、出現しつつある帝国はアメリカ的ではないし、合衆国は帝国の中心ではない。……これは、合衆国政府と合衆国の領土が他の国と何も違わないということではない。合衆国は確かに帝国のグローバルな分割とヒエラルキーの中で特権的地位を占めている。しかし、国民国家の権力と境界線が衰退するにつれて、国民的領土間の様々な差異はますます相対的なものになる。それらは今では性質の違い（例えば宗主国領土と植民地領土の違いのような）ではなく、程度の違いである」(p.384)。

同様に、「帝国」という表象が「ヨーロッパ中心主義」的であるという批判も、あらかじめ封じられてしまう。「帝国の系譜学はこの［資本主義的生産様式の発展に伴うという］意味ではヨーロッパ中心主義的だが、しかし現在の帝国の権力はどの地域にも限定されない。ある意味でヨーロッパと合衆国に由来する支配の論理は、いまや全地球で支配の実践を備給している」(p.xvi)。

それでは、「中心がない帝国」におけるアメリカの地位は、どういうものなのだろうか。中心ではないが「特権的」だというのは、どういう事態を意味しているのだろうか。それは、アメリカが、「グローバルな憲法＝政治体制のピラミッド」の頂上に位置して「軍事的ヘゲモニー」を行使することのできる「唯一の超権力」(p.309)だということである。

ハートとネグリは、この「グローバルな政治体制のピラミッド」を、次のように三つの階層からなるものと考えている。上から見ていくことになるが、第一階層はさらに三つの水準に区分される。第一階層第一水準に位置するのが、「軍事的ヘゲモニーを有する唯一の超権力としての合衆国」である。第二水準には、G7のような「グローバルな金融制度を管理する国民国家群」が来る。第三水準に位置するのは、「文化的・生－政治的権力を配備する諸団体」である。IMFやWTOなどを考えればいいであろう。第二階層はさらに二つの水準に分かれるが、第一水準に位置するのが「多国籍企業のネットワーク」であり、第二水準には、「ヘゲモニー権力との仲介機能を果たす一般の国民国家群」が位置する。そして最後に、第三階層には、「民衆の利益を代表する諸集団」、つまり、国連総会や各種のNGOが入ることになる(pp.309-11)。

ここで注意しておかなければならないのは、ハートとネグリが、アムネスティー・インターナショナルや「国境なき医師団」のような人道的NGOをも含めて、NGOを「帝国」の「道徳的介入」の担い手だと見ていることである。著者たちは次のように言う。「このような人道的NGOは（参加者の意図には反しているかもしれないが）実際に新しい世界秩序のもっとも強力な平和的武器の一つである。……これらのNGOは、帝国の構成という生－政治的文脈に完全に没頭している」(p.36)。

このように「帝国」は、「ネットワーク権力」であると同時に「ピラミッド」的構成をもつのだが、ハートとネグリは、その権力行使の手段を次のように説明している。

「帝国の管理は三つのグローバルで絶対的な手段を通して行われる。爆弾、貨幣、エーテル［コミュニケーション媒体］である。……爆弾は王制的、貨幣は貴族制的、エーテルは民主制的権力である。……合衆国が新ローマあるいは一群の新諸ローマだと見えるかもしれない。ワシントン（爆弾）、ニューヨーク（貨幣）、ロサンゼルス（エーテル）。しかし、そのような帝国空間の領域的概念は、帝国装置の中核の根本的柔軟性・移動性・脱領土化によって持続的に不安定になっている。軍事力の独占と貨幣調整は部分的に領域的に決定されるかもしれないが、コミュニケーションはそうされえない」（pp.345-6）。

ここで誰もが2001年9月11日を想起してしまうだろう。ハートとネグリは「帝国に中心はない」と言うのだが、そして確かに単一の中心はないのかもしれないが、「帝国」に「ワシントン（爆弾）、ニューヨーク（貨幣）、ロサンゼルス（エーテル）」という複数の中心があることは、著者たちも認めざるをえないのである。つまり「合衆国が新ローマあるいは一群の新諸ローマだと見えるかもしれない」ことは、否定しようがないのだ。

したがって、問題はこういうことになる。20世紀の世界戦争が、一度目はオスマン・オーストリア・ロシアという解体に瀕した諸帝国の内紛として、そして二度目はそれらの帝国解体後の新秩序形成をめぐる争いとして戦われたのに対して、20世紀末のグローバリゼーションは、実際には最後の旧型帝国にすぎなかった「ソヴィエト連邦」の解体の徴候とともに始まった。1989年の「東欧革命」とペレストロイカの進展による冷戦構造の消滅が、ハートとネグリの言い方に従えば「帝国」による初めての警察権行使である湾岸戦争を可能にしたのである（1990年8月2日にイラク軍がクウェートに侵攻した翌日、アメリカのベーカー国務長官とソ連のシュワルナゼ外相が共同声明を行い、イラクへの対抗を表明した）。「ソヴィエト連邦」が消滅するのはその翌年であるが、このようにして成立した「帝国」とは、敵対する他の帝国が消滅することによって完成した「アメリカ帝国」の単一ヘゲモニー体制にほかならないのではないか、ということである。

1990年以後の現状を「アメリカ帝国」の拡大と見る視点は、根強く存在している。たとえば古矢旬は、ハートとネグリと同様に「合衆国はその共和国としての出発時点においてすでにいちじるしく『帝国』的であった[7]」ととらえたうえで、ハートとネグリが現代の「帝国」の特質と見なす「海外植民地にたいする主権的支配に立脚するものではない」覇権システムの構造を、まさに「大英帝国」とは異なる「アメリカ帝国」の特徴だとしている[8]。言い換えれば、ハートとネグリが「帝国主義」と「帝国」の概念的差異と見なしたものを、古矢は「大英帝国」と「アメリカ帝国」の覇権システム構造の歴史的差異だとしているのである。そして古矢は、20世紀は、「移民国家／理念国家」としての「アメリカの世界化」を前提とした、軍事的支配・経済的援助・文化的浸透を三位一体として進展する「世界のアメリカ化[9]」の過程であったと総括するのだが、そのようにつねに「世界」に対する「主体」として意識し行為してきたアメリカに、自らもまた世界の一部であるこ

とを暴力的に意識させたのが「2001年9月11日」であったと理解している[10]。

藤原帰一も、「帝国が戦争を戦い、戦いこそが帝国の正義を支えるという、軍事大国としてのアメリカが持つ古典的な特徴に焦点を当てるため」に、「アメリカへの権力集中を捉える言葉として『帝国（empire）』概念を用いる[11]」と説明している。現在の世界は「アメリカが帝国となった世界[12]」なのである。彼は、まさにアメリカが権力の中心であることを示すために「帝国」という言葉を使っているのだから、この言葉に持たせている意味は、ハートとネグリとは正反対になる。

しかしながら、他方には、このような「アメリカ帝国」論とはかなり異なるアメリカ認識も存在する。たとえば、ウォーラーステインは、1995年の『アフター・リベラリズム』で、アメリカが「世界システムの覇権強国」である時代は「1945年に始まり1990年に終わった[13]」と述べている。1990年の湾岸戦争における「アメリカの軍事力の誇示は、アメリカが経済的に弱体であることを明確にした[14]」からである。この戦争は日本をはじめとする他国に戦費を依存することで初めて可能となったのであり、しかもアメリカ自らがそのことを明らかにした、ということである。1999年の『われわれが知っているような世界の終わり』でも、彼は、近代世界システムを構成する諸国家が「強さを失い」、しかも「人々がこれまで諸国家に認めてきた正統性が低下している」ことによって、「システムは分岐点に達した[15]」、と主張している。

したがって、1990年を世界のあり方の大きな転換点と見る点では共通しているのだが、ウォーラーステインから見れば、ハートとネグリの言う「帝国」とは、むしろ500年にわたって存続した「近代世界システム」が解体し始めたという過渡期の状態を表現するものにすぎない、ということになる。その意味では、「帝国」とはまさに「カオス」の別名なのである。

３．支配の全体性

ハートとネグリの『帝国』を一読して気づく第二の問題点は、その「生－権力的」な支配の全体性に関する議論である。この全体性論は、グローバルな管理社会論と多国籍企業論の二本立てなのだが、両者の関連づけがかなりあいまいだということである。

著者たちが第一に強調するのは、グローバリゼーションによって支配的な生産過程のあり方そのものが大きく変化したということである。「その結果、工業的工場労働の役割は減少し、コミュニケーション的・協同的・情動的な労働communicative, cooperative, and affective laborに優先権が与えられる。グローバル経済のポストモダン化のなかで、富の創造は、われわれが生－政治的biopolitical生産と呼ぼうと思うものに、つまり社会的生活それ自体の生産に向かっている。そこでは、経済的なもの、政治的なもの、文化的なものがますます重なり合い、相互に包み合っている」（p.xiii）。

このようにハートとネグリは「工業的工場労働」から「コミュニケーション的・協同的

・情動的労働」へと基幹的な労働力の移動が生じていると言うのだが、これは、別の言い方をすれば、産業の重心が工業部門から様々なサービス部門へと変遷しているということである。たとえば、「ヘルスケア・教育・金融から輸送・娯楽・広告まで。……それらの特徴は一般に、知識・情報・情動・コミュニケーションが中心的役割を果たすことである」(p.285)。したがって、彼らが主張しているのは「脱工業化」論の一変種だと言っていい。

著者たちは、現在進行している「労働の質と本性の変化」を「労働の非物質化」と名付け、それを次の三つの側面において特徴づけている。第一は「生産過程の情報化」であるが、主として考えられているのは「フィードバックと制御」であり、例として挙げられるのは、「フォーディズム・モデルからトヨティズム・モデルへの工場労働の変化」(p.289)なのである。第二は「コンピュータによる知的生産」なのだが、これも、サービス・文化・知識・コミュニケーションの生産がコンピュータによって行われている、ということにすぎない。第三は「人間的接触と相互行為の情動的労働」であり、具体的には、ケア産業や娯楽産業が重要性を増してきているということである。

生産過程の内部における変化をまずこのように把握したうえで、ハートとネグリが次に強調するのは、このような「コミュニケーション的・協同的・情動的な労働」がグローバルな規模で接合され、組織されているということである。この事態を彼らは「ネットワーク生産」という言葉で表現している。つまり、個々の生産現場がネットワーク状に接続されることによって、生産の「地理的な脱中心化」と「脱領土化」が進み、いわば「抽象的な協同」が成立しているのである。しかし、その対局においては、「生産管理と金融の中心化」が進行するのであり、そのような中心になるのは「(ニューヨーク、ロンドン、東京のような)少数のキー・シティ」(p.297)だと想定されている。これは、サスキア・サッセンの言う「グローバル・シティ[16]」にほぼ等しい。したがって、ハートとネグリは、一方で生産の「地理的な脱中心化」と「脱領土化」を強調しながらも、他方では「生産管理と金融の中心化」を指摘し、特定の都市をその中心として名指すかぎりで、「グローバル経済における領土性[17]」を強調するサッセンに事実上同意していると考えられる。

このような「労働の非物質化」と「ネットワーク生産」の成立によって出現するのが、「グローバルな管理社会」である。それを、ハートとネグリは次のように描いている。

「規律訓練社会disciplinary societyから管理社会the society of controlへの社会形態の歴史的で画期的な変遷passage。……そこでは指令のメカニズムはますます『民主的』になり、ますます社会的分野に内在的になり、市民の脳と肉体を通して分配されている。支配に固有の社会的統合と排除の行為は、ますます諸主体自身のうちに内部化される。権力は今では、生の意味や創造性の願望からの自律的疎外の状態に向けて、直接に脳(コミュニケーション・システム、情報ネットワークなどで)と肉体(福祉制度、活動の監視などで)を組織する諸機械を通して行使される」(pp.22-3)。

そのような現実認識をふまえたうえで、ハートとネグリは次のように「グローバルな管理社会」の反転可能性を示唆するのだが、しかし、これはあまりにナイーヴではないだろ

うか。「今日では生産性、富、社会的剰余の創造は、言語的・コミュニケーション的・情動的ネットワークを通した協同的相互行為の形態を取る。それ自身の創造的エネルギーの表現において、非物質的労働はこうして一種の自然発生的で初歩的な共産主義の可能性を提供しているように思われる」（p.294）。

このような「グローバルな管理社会」の管理主体として、もっと具体的には、「ネットワーク生産」の組織者として、著者たちが想定しているのが、多国籍企業である。つまり、「グローバルな管理社会」とは、多国籍企業の管理ネットワークの別名なのである。

「巨大な多国籍企業が、一定の重要な点で生－政治的世界の基本的な結合組織を構築している。……多国籍企業は［従来の国民的な植民地主義的・帝国主義的システムに代わって］領土と人口を直接に構築し接合する。企業は国民国家を、自らが始動させた商品・貨幣・人口のフローを記録するたんなる道具にする傾向がある。多国籍企業は労働力を様々な市場に直接に分配し、資源を機能的に配置し、世界生産の様々な部門を階層的に組織する。投資を選択し金融操作を指示する複雑な装置が、世界市場の新しい地理を、あるいは実際に世界の新しい生－政治的構築を決定する」（pp.31-2）。

ハートとネグリによれば、このように多国籍企業の管理ネットワークという姿を取るにいたった「世界市場」こそ、「帝国権力」の目に見える姿にほかならない。

「その理想的形態においては世界市場には外部は存在しない。全地球がその支配領域である。……フーコーがパノプティコンを近代権力の図解として認識したのとまさに同じように、おそらく世界市場が帝国権力の適切な図解として使えるだろう。……帝国のこの滑らかな空間には、権力の場所というものはない――それはどこにもあるしどこにもない。帝国はどこにもない場所ou-topia、あるいは実際に非場所non-placeである」（p.190）。

パノプティコンとは、ジェレミー・ベンサムが構想して1787年に発表した集団施設の建築案であり、中央監視所を伴う円形建築のことである。ベンサムはこれを工場・貧民収容所・病院・学校にも応用可能であると考えていたが、本来的には刑務所のモデルであることは言うまでもないだろう[18]。このパノプティコンを、ミシェル・フーコーは、身体の訓練と習慣によって自発的服従が生まれる近代的空間（＝「規律訓練社会」）のモデルとして取り上げたのだが[19]、ハートとネグリは、多国籍企業の管理ネットワークとしての「世界市場」こそが「規律訓練社会」に取って代わる現代的「管理社会」のモデルだと言うのである。「権力の遍在」、あるいはむしろ、各自の脳と肉体が直接にネットワークに接続され、つねにモニターされている状態。それが著者たちの描くイメージである。

それでは、このような遍在する帝国権力の全体性に対して私たちはどう対抗したらいいのか。興味深いのは、ハートとネグリが、ポストモダン的「差異の政治学」は権力の戦略に出し抜かれたと断定していることである。彼らによれば、ジャン＝フランソワ・リオタールやジャン・ボードリヤール、ジャック・デリダなどの唱える「差異の政治学」は、近代的な「自己と他者、白と黒、内部と外部、支配する者と支配される者を定義する二項対立」（p.139）への批判としては有効だが、それとは異なる帝国権力のあり方に対しては、有

効な批判たりえないし、ホミ・バーバやエドワード・サイードなどが主張する「異種混交性Hybridityの解放、あるいは植民的二進法の超克」（p.143）も、グローバル権力の理論的把握のためには不十分だということになる。

「ポストモダニストとポストコロニアリストに身近な概念の多くは、現在の［多国籍］企業資本と世界市場のイデオロギーの中に完全な対応物を見いだす。……循環、移動性、多様性、混合はまさにその可能性の条件である。……差異（商品、人口、文化などの）は世界市場において無限に増加するように見える」（p.150）。「［多国籍］企業は差異をその支配領域内部に包含し、こうして創造性、自由な戯れ、多様性を企業の中で最大化しようとする。人種、性、性的志向が異なるすべての人々が潜在的には企業に包含されるべきなのである」（p.153）。

要するに、ハートとネグリが事実上主張しているのは、「多国籍企業の管理ネットワーク」としての「帝国」は外部を喪失した資本主義だということであり、現代の諸理論はそのような「帝国」の現状把握に失敗している、ということである。著者たちは、このように多国籍企業がポストモダン的「差異の政治学」を出し抜いたと言うのだが、しかし、よく知られているように、すでに世界システム論は、資本が世界システム内部で労働力価値の「差異」を利用し再生産することで存続することを指摘している。多国籍企業が利用し最大化しようとしているのも、結局は、人種主義と性差別、「労働力のエスニック化」に立脚した垂直分業にほかならない[20]。その意味で、「帝国」はけっしてハートとネグリが言うような「滑らかな世界」ではない。問題は、そもそも『帝国』には経済理論と経済分析も、資本主義と国家との関係付けの理論もない、ということである。しかし、この点については節を改めて検討することにしよう。

４．インターナショナリズムの終焉

『帝国』が伝統的な「帝国主義」論に対する論争の書であることはすでに述べた。それはまた「世界システム」論に対する批判の書でもある。しかし、その批判はいささか微妙である。ハートとネグリも、「資本はその発端から一つの世界権力たろうとする、あるいは真に唯一の世界権力たろうとする傾向がある」（p.225）ことを認めているのであって、著者たちと「世界システム」論者との争点は、基本的には、資本主義世界システム内部における政治的権力のあり方をどう把握するかという一点にかかわるからである。ウォーラーステインの「世界システム」論に対する著者たちの批判は、次の文章に尽きている。

「資本主義的生産がはじめから普遍的あるいは普遍化する次元をもつことへの正当な注目が、現代の資本主義的生産と権力のグローバルな諸関係における断層あるいは変化に対してわれわれを盲目にしてはならない。……構成的constitutionalには、グローバリゼーションの過程はもはやたんなる事実ではなく、政治権力の単一の超国民的姿を考案する方向に進む法律的定義の源泉でもある」（pp.8-9）。

従属理論の提唱者として「中心－周辺」という構造概念をはじめて提起したサミール・アミンに対するハートとネグリの批判も、ほぼ同じことに帰着する。

「現実的で重要な［帝国主義からの］連続線を過小評価するわけではないが、われわれの考えでは注意すべき重要なことは、これまでは帝国主義的列強間の紛争や競合とされてきたものが、それらすべてを重層決定し、統合的に構造化し、決定的にポストコロニアルでポスト帝国主義的な権利の共通見解に基づいて取り扱う単一の権力、という考えによって置き換えられてしまった、ということである」（p.9）。

よく知られているように、ウォーラーステインによる資本主義「世界システム」の定義的説明は、「資本主義的な『世界経済』の顕著な特徴は、経済面での決定が第一義的に『世界経済』にむけられるのに対し、政治的決定は『世界経済』内のもっと小さな、法的まとまりをもつ組織、すなわち国家……にむけられたことにあった[21]」、ということであった。とすれば、「世界システム」論と「帝国」論の違いは、グローバルな「単一の政治権力」の成立を認めるかどうか、ということに尽きるはずである。

しかしながら、第三の問題として指摘しなければならないのは、ハートとネグリが従属理論や世界システム論の重要な問題提起であった「中心－周辺」という不均等で非対称的な重層的構造認識を否定し、資本主義的世界経済のあり方そのものをきわめて平板な均質的なものと見なしていることである。つまり、彼らによれば、「世界市場」の完全実現に伴って確立した「グローバルな管理社会」は、のっぺりとした「滑らかな世界」なのであって、「第三世界」や「中心－周辺」あるいは「南北」といった構造的概念は、もはや失効しているのである。

著者たちが強調するのは、「GATT、WTO、世界銀行、IMF……この超国民的な司法的足場に支えられて、生産と循環のグローバリゼーションは、国民的な司法的構造の有効性を廃棄した」（p.336）ということなのだが、事実認識としては正当なこのような「司法的構造」認識から、彼らは経済的な構造に関しても、一挙に次のような結論を導く。すなわち、「不均等発展の地理学と分割とヒエラルキーの線は、もはや固定的な国民的あるいは国際的境界線にではなく、流動的な国民内的・超国民的な縁取りに沿うことになる」（p.335）。

ここでハートとネグリが「国民内的な縁取り」と表現しているのは、ニューヨークやロンドン・東京などの「グローバル・シティ」の内部での貧富の差の拡大であり、同時にそこでは「公共空間」が衰退して、ロサンゼルスに典型的に見られるような私的空間の「要塞化」が進行している、という事態である。つまり、「中心」あるいは「北」の内部で「新しい分節Segmentations」が生じているのであり、いわば「周辺」あるいは「南」が内部化されている、ということである。したがって、「帝国の行政」の目的は、このように分節された社会的諸力の統合をはかり、様々な差異を平定して管理することであって、その正当性の根拠は、紛争処理の局所的有効性に置かれることになる。

他方で、著者たちが「超国民的な縁取り」という言い方で表現しようとしているのは、「資本が世界となった」ことの結果として、「危機」もまたグローバルな規模で遍在して

いるということである。「搾取への敵対が生産のグローバルなネットワークを横断して分節化され、あらゆる各結節点で危機を規定している。危機は資本主義的生産のポストモダン的全体性と共存している。……コミュニケーション的生産関係の一般化に基づく技術的発展が危機の原動力である」（pp.385-6）。

アミンはかつて「ある体制はその中心部から乗り越えられるのではなく、むしろその周辺部から乗り越えられる[22]」と述べた。それに対して、ハートとネグリの言う「滑らかな世界」とは、「中心－周辺」という不均等で非対称的な構造的関係が消滅したことによって権力と搾取がグローバルに遍在し、危機もまた遍在している世界なのであり、したがって「世界はいたるところから変わる」可能性をもつ世界でもある、ということになる。

そのことと密接に関連するのだが、著者たちは、資本主義世界システムへの反対運動のあり方そのものも大きく変わったと考えており、そのことを次のような挑発的な言い方で表現している。これが第四の問題点である。

「［国民的労働者階級の国際的連帯に基づく］そのようなプロレタリア・インターナショナリズムの時代は終わった、ということを今日われわれはみな明確に認識しなければならない。……プロレタリアートは、実際今日ではまさに自らがインターナショナルではなく（少なくとも傾向的には）グローバルであることに気づく」（p.50）。

このように「プロレタリアート」の運動がグローバルなものになったことの証拠として著者たちが挙げるのが、1989年の天安門事件、パレスティナのインティファーダ、1992年のロサンゼルス暴動、1994年に始まったメキシコのチアパスの蜂起、1995年2月のフランスでの連続的ストライキ、1996年の韓国の闘争などである。

ここで挙げられた例の多くが、狭い意味での労働運動あるいは階級闘争とは言えないことからもすぐわかるように、ハートとネグリが「プロレタリアートの運動」という場合には、労働と反乱の主体が根本的に変化しているという認識が前提になっている。「男性の集団的工場労働者がパラダイム的姿である工業労働者階級は……資本主義経済における特権的地位とプロレタリアートの階級構成におけるヘゲモニー的地位を失った」のであり、「今日の生産的活動の様々な姿のうちで、（コミュニケーション、協同、情動の生産と再生産に関わる）非物質的労働力の姿が、資本主義的生産の図式においてもプロレタリアートの構成においてもますます中心的な地位を占めている」（p.53）のである。

このように「プロレタリアートの階級構成」における変化を強調したうえで、著者たちは、先に挙げた様々な闘争を「帝国」に対する「グローバルなレベル」での直接的攻撃だと特徴づける。「これはインターナショナリズム的闘争の新たなサイクルの現れではなく、むしろ社会運動の新しい質の出現だと認識できなければならない。……第一に、それぞれの闘争は、ローカルな状況にしっかり根ざしているが、直接にグローバルなレベルに飛躍し、帝国の構成をその一般性において攻撃している。第二に、すべての闘争は、経済闘争と政治闘争の伝統的区別を破壊している。闘争は同時に経済的で政治的で文化的であり――だから生－政治的闘争、生の形態をめぐる闘争である。それは、新しい公共的空間と新

しい共同体の形態を創造する構成的闘争である」（p.56）。

しかしながら、それらの闘争が「帝国」への攻撃であるのは、「即自的」にそうであるにすぎない。つまり、ハートとネグリにとってはそのような意味をもつ、ということにすぎないのであって、それらの闘争への参加者自身がそう自覚しているわけではない。何よりも、それらの闘争には、相互の連帯も意志疎通もないのだから。

「［諸闘争の意志疎通を妨げる］障害の一つは、闘争が対抗する共通の敵が認識されていないことである。北京、ロサンゼルス、チアパス、ナブルス、パリ、ソウル。諸状況は全く独自であるように見えるが、実際にはそれらはすべて直接に帝国のグローバルな秩序を攻撃し、真のオルタナティヴを探し求めている。だから共通の敵の本性を明らかにすることが本質的な政治課題である。第二の障害は、実際に第一の障害から派生するのだが、それぞれの闘争の独自な言語を世界市民的言語に『翻訳』できる闘争の共通言語がないことである。……重要な政治課題は、かつて反帝国主義とプロレタリア国際主義の言語が闘争のためにしたように、コミュニケーションを容易にする新しい共通言語を構築することである。おそらくこれは、類似ではなく差異に基づいて機能する新しいタイプのコミュニケーション、単独性のコミュニケーションでなければならない」（pp.56-7）。

著者たちは、いわば「無い物ねだり」をしているのだろうか。ある意味ではそうである。彼らが前提としているのは、各国でマルクス主義的あるいは社会主義的な労働運動が解体し、国民的プロレタリアートのインターナショナルな連絡組織や連帯ももはや存在せず、そしてそれに取って代わる「思想＝共通言語」も、グローバルな意志疎通や連帯もまだ存在しない、という現状認識である。そのような状況の中で、彼らは、未来のグローバルな運動の「徴候」を必死に探しているのだと言うことができるだろう。だから、次のような文章も、半ば予言であり、希望の表明なのである。

「帝国への現代的変遷の中で、もぐらの構築したトンネル［労働運動の国際主義的な連絡と連帯］は蛇の無限の波動に取って代わられた。近代世界とその地下通路の深さは、ポストモダニティではすべて表面的になった。今日の闘争は、これらの表面的な帝国の風景を横切って黙々と滑っていく。おそらく闘争のコミュニケーション不可能性、うまく構築された伝達トンネルの欠如は、実際は弱さというよりむしろ強さである。……帝国は、そのヴァーチャルな中心が表面を横切るどの点からも直接にアクセスできるような、一つの表面的世界を呈している。……これらの闘争は水平的にはリンクしていないが、それぞれが垂直に直接に帝国のヴァーチャルな中心に飛躍する、という事実によってこの新しい局面は画される」（pp.57-8）。

現代の「帝国」の成立によって、これまでの対抗権力は無効になった。これが、ハートとネグリの現状認識なのだが、興味深いのは、「帝国」の成立そのものが対抗権力の闘争の成果だ、という歴史認識である。「19世紀と20世紀の最も強力な反乱的事件すべての中に生きていたプロレタリア的・反植民地的・反帝国主義的な国際主義、共産主義のための闘争は、資本のグローバリゼーションの過程と帝国の形成を予想し予期した。このように

帝国の形成はプロレタリア国際主義への応答なのである」（p.51）。

このような認識に基づいて、著者たちは、「帝国」そのものの中に新たな解放の「徴候」を読み取ろうとする。

「グローバリゼーションに先行してそれを予期した闘争は、生きている労働の表現だった。生きている労働は、自分に押しつけられた厳密な領土化の体制から自分を解放しようとした。生きている労働は、自分に敵対して蓄積された死んだ労働と争うとともに、自分を囚人にする固定化された領土化構造、国民的組織、政治的姿をつねに破壊しようとする。……群衆の活動性と主体性と願望の生産という展望を考えるならば、グローバリゼーションが、従来の搾取と管理の構造を現実的に脱領土化するかぎりで、いかに実際に群衆の解放の一条件であるかが認識できるだろう」（p.52）。

要するに、経済的グローバリゼーションと政治的「帝国」が人々を「国民国家」への束縛から解き放ったのであり、その結果、「国民的」労働者階級の運動に基礎をおくインターナショナリズムは無効になったのだが、だからこそ、ナショナリズムからも解放されて直接に「帝国」に直面する人々のグローバルな闘争が可能になる、というのがハートとネグリの（半ば予言を含んだ）歴史＝現状＝未来認識なのである。

このように『帝国』の独自性は、国家間システムの現状をわかりやすく段階付けしたことにある。しかし、国民国家とナショナリズムは本当にもう「敵」ではないのだろうか。ナショナリティの脱構築は、「帝国」への移行によって自動的に与えられるものなのだろうか。ハートとネグリの『帝国』の最大の問題点はここにある。つまり、彼らは現在の「国民」国家とナショナリズムの意味と力を過小評価しているように私には思われる。平野千果子の言葉を援用すれば、「ほぼあらゆる民族が、一つの国民国家に服さなければ、グローバル化の進む社会をまだ生きていけないのが皮肉な現実である[(23)]」のに。

５．群衆の構成的権力

最後に、ハートとネグリの『帝国』がどのような変革の展望を描いているのかを見ることにしよう。彼らは「帝国」の成立と同時に「帝国」を変革する可能性が成立していると言うのだが、「帝国」成立の担い手であると同時に変革の主体であると想定されているものこそ、「すべての非搾取労働者」を包括する「群衆multitude」である。

ハートとネグリが「群衆」と呼ぶ存在の中心をなすのは、「コミュニケーション、協同、情動の生産と再生産に関わる非物質的労働力」の担い手である。著者たちが「男性の集団的工場労働者がパラダイム的姿である工業労働者階級は……資本主義経済における特権的地位とプロレタリアートの階級構成におけるヘゲモニー的地位を失った」（p.53）と見なしていることはすでに指摘したが、これは「プロレタリアート」がいなくなったということではなく、「プロレタリアート」という言葉が指示する対象が、女性や子供を含む多様な未組織（むしろ非組織）労働者にまで拡大したということである。いささかわかりにくい

言い方だが、彼らはこう述べている。

「プロレタリアート［＝工業労働者階級のヘゲモニー的立場］が世界の舞台からまさに姿を消しつつあるとき、プロレタリアート［＝資本に従属し搾取され、資本の支配の下で生産するすべての者という意味での］が労働の普遍的な姿になりつつある。……資本が生産諸関係をよりグローバルなものにするにつれて、労働のあらゆる形態がプロレタリア化される傾向にある」（p.256）。

このような「グローバルな生産関係」の中におかれた「グローバルなプロレタリアート」が「群衆」なのだが、そのような言い方でハートとネグリが強調するのは、第一に、「搾取の現場」がいたるところに「遍在」しているということである。つまり、「［脱ローカル化され普遍的になった］新しい生産諸力は特定の場所をもたないが、それはそれらがあらゆる場所を占め、この無限の非場所で生産し搾取されているからである。……帝国は労働が搾取される世界生産の非場所である」（p.210）。その結果、「もはや外部として認識できる場所がないのなら、われわれはあらゆる場所で抗わなければならない」（p.211）、ということになる。言い換えれば、「われわれは……グローバルに考えてグローバルに行動することを習い覚えなければならない。グローバリゼーションには対抗グローバリゼーションを、帝国には対抗帝国をぶつけなければならない」（pp.206-207）。

第二に、「群衆」が「グローバルなプロレタリアート」であるというのは、彼らが実際に「国境を越える労働者」として現れるからである。

「規律訓練の時代にはサボタージュが抵抗の基本的考えだったが、帝国的管理の時代には脱走がそれである。……脱走と集団移動は、帝国的ポストモダニティの内部でそれに抗う階級闘争の力強い形態である。……新しい遊牧民の群、新しい野蛮人の種族が現れて、帝国に侵入し帝国を撤退させるだろう」（pp.212-3）。あるいは、こういう言い方。「新しい規律訓練体制がグローバルな労働力市場への傾向を構築するとき、それはそれへの反対命題の可能性をも構築する。それは、規律訓練体制から逃れたいという願望と、自由を欲する規律づけられない労働者群衆を傾向的に構築する。……この人口の移動性は国内市場（特に国内労働市場）を個別に管理することを困難にする」（p.253）。

このように搾取の現場からの「脱走と集団移動」を繰り返す「遊牧民＝ノマド」の出現。ハートとネグリによれば、それは同時に「国民」という束縛への抵抗でもある。

「拘束への群衆の抵抗――一つの国民、一つのアイデンティティ、一つの民族への帰属という奴隷制に対する闘争、したがって主権とそれが主体性に割り当てている制限からの脱走――が、完全に決定的である。ノマディズムと異種族混交がここでは徳の姿として、帝国の領土における第一の倫理的実践として現れる。……今日の存在論の空間的次元は、人間的共同体を求める願望のグローバリゼーション、つまりそれを実際に共通のものにするという群衆による具体的過程を通して提示されている」（pp.361-2）。

このように「群衆」はいわばグローバリゼーションのオルタナティヴを要求する存在として描かれている。ネグリが一貫して強調してきたように、「群衆」は「構成的＝憲法制

定的constitutive権力」の担い手なのである[24]。

では、「群衆」が要求するオルタナティヴとは、具体的にはどのようなものなのだろうか。著者たちは、次のような三つの政治的要求を列挙している。

第一は、国境を越える労働者の権利保障としての「グローバルな市民権」である。

「グローバルな群衆のための政治的綱領の第一の要素、第一の政治的要求は、グローバルな市民権である。……すべての人に滞在許可をという要求が意味するのは、何よりまず、誰でも自分が住み働く国で完全な市民権を有するべきだということである。……この政治的要求は、資本主義的生産の現実を法的に認め、すべての労働者に完全な市民権を与えよ、ということである。……最初は資本が必要とする移民を法的に認めるよう各国に要求するとすれば、次に群衆は自分自身で移動を管理することを要求しなければならない。群衆は、自分が移動するかどうか、いつどこに移動するかを決定できなければならない。群衆はつねに移動を強いられるよりむしろ一カ所に留まって楽しむ権利ももたなければならない。自分自身の移動を管理する一般的権利が、群衆によるグローバルな市民権の最終的要求である。……グローバルな市民権は、空間に関する管理を奪還して新しい地図作成法をデザインする、群衆の権力である」(p.400)。

第二は、生産現場のネットワーク化と偏在に対応する「社会的賃金」である。

「生－政治的生産のこの［生産・再生産・非生産的労働を含む］一般性が群衆の第二の綱領的な政治的要求を明確にする。社会的賃金と万人のための所得保障である。……社会的賃金は家族［＝性的分業の武器としての扶養手当］を超えて、失業者を含む群衆全体にまで拡大される。群衆全体が生産しているからであり、その生産物は総社会的資本の立場から必要だからである。……労働が個人化されえず測定されえないとき、『平等な労働には平等な支払いを』という古いスローガンを支持することはできない」(p.403)。

そして第三は、自分自身の精神と身体に統合された「生産手段の奪還」である。

「群衆の第三の政治的要求はこう定式化できる。奪還の権利。奪還の権利は何よりまず生産手段の奪還の権利である。……生産手段がますます群衆の精神と身体に統合されるにつれて、群衆は生産するのに機械を使うだけでなく、ますます機械そのものになる。この文脈では奪還とは、知識・情報・コミュニケーション・情動に自由にアクセスし、それらを管理できることである――これらは主要な生－政治的生産手段だからである。……奪還の権利は、実際に群衆の自己管理と自律的自己生産の権利である」(pp.406-7)。

第一の「グローバルな市民権」は、部分的にはヨーロッパ連合の「EU市民権」として実現しているものであるし、さらにそれを超えて、EU域外からの移民労働者の権利保障の問題として、ヨーロッパで今まさに焦眉の実現課題となっている[25]。それに対して、第二と第三の要求は、表現の仕方は異なっていても、むしろ伝統的な共産主義的主張であると言ってもいいだろう。ハートとネグリは、その正当性根拠を次のように述べているからである。「群衆の生産様式は、労働の名において搾取に対抗し、協同の名において所有に対抗し、自由の名において腐敗に対抗する。それは労働する身体を自ら価値付けし、協同を通

して生産的知性を奪還し、存在を自由に変える」（pp.408-9）。

著者たちは別の箇所で、「人間の権力が直接に自律的な協同的・集合的力として現れるとき、資本主義的前史は終わる」（p.366）と述べているのだが、これがマルクスの『経済学批判』序言の有名な文章の言い換えであることは誰でもすぐに気がつくだろう。

あるいは、ハートとネグリの主張は、むしろ伝統的な人間主義の宣言、「人間的なるものの復権」の要求だと言うべきかもしれない。彼らは次のように述べるのだから。「今日の生産的マトリクスにおいては、労働の構成的権力は、人間的なるものの自己価値付け（世界市場の全領域での万人の平等な市民権）として、協同（意志を通じ合い、言語を構築し、コミュニケーション・ネットワークを管理する権利）として、そして政治的権力として、あるいは実際に権力の基礎が万人の欲求の表現によって規定されるような社会の構成として、表現することができる」（p.410）。

こうして『帝国』は、次のような美しい、しかし謎に満ちた文章で終わる。

「アッシジの聖フランチェスコは、生まれつつある資本主義に反対してあらゆる道具的規律を拒絶し、（貧困と構成された秩序の中での）肉の禁欲に反対して、あらゆる存在と自然、動物、われらが兄弟たる月と太陽、野の鳥、貧しい搾取されている人間を含む喜ばしい生を、権力意志と腐敗に対置した。ポストモダニティの中でもう一度われわれは、権力の惨めさに存在の喜びを対置しつつ、フランチェスコの状況にあることに気づく。これはどんな権力も管理できない革命である――愛と素朴さと無垢の中には、生－権力と共産主義、協同と革命がともにあるからである。これは共産主義的であることbeing communistからくる抑えがたい軽やかさと喜びである」（p.413）。

このような『帝国』について、スラヴォイ・ジジェクは、「ハートとネグリは私たちの時代のために『共産主義者宣言』の書き直しを行っている」と絶賛し、エティエンヌ・バリバールは、「本書は疑いもなく、哲学者、政治学者，社会主義者たちに、永続的で激しい議論を引き起こす引き金となるだろう」と高く評価している[(26)]。マルクスたちの『共産党宣言』は、プロレタリアートに自国のブルジョアジー打倒を求める点で、中心諸国内部の革命の理論であり[(27)]、周辺諸地域の変革の展望を直接に示すものではなかった。その後のマルクス主義は、確かに周辺における反植民地主義＝反帝国主義の闘争にコミットしたのだが、結局それをナショナリズムと接合させてしまった。それに対してハートとネグリの『帝国』は、全世界の群衆に直接に「帝国のヴァーチャルな中心」への攻撃を求める点で、かつてのマルクス主義よりもはるかに普遍主義的であるが、しかし、その世界認識はあまりに抽象的かつ図式的であると言わざるをえない。『構成的権力』と同様に、『帝国』も現状分析の書というより、半ば政治哲学史の書であり、半ば予言の書なのである。特に、最後の「グローバルな市民権」という要求はそれ自体重要でかつ正統な主張であるが、しかし、これらの要求が突きつけられる場は「帝国」なるものではなく、いまだそれぞれの国民国家でしかありえないのではないか。私たちの実践的課題はなお、「グローバルに考えつつ、ナショナルな場で、ナショナルなものを脱構築すること」ではないのだろうか。

栗原幸夫は、「ネグリは資本の文明化作用に対する信頼があるのではないか。文明化作用が必ず対抗勢力を生み出すと思っている。しかしそれについての分析がない[28]」、と発言しているが、ネグリの主張する「群衆のヴァーチャリティ」論が『経済学批判要綱』の「社会的個人」論に着想を得た疎外論的な潜在力論であることは明らかである[29]。これは、具体的な状況に適用するにはあまりにも抽象的な長期的「傾向」に関する議論にすぎないのだが。また「群衆」という概念については、『帝国』出版後のインタビュで、ハート自身がこう弁明している。「群衆＝数多性を社会的および社会学的な言葉でどのように理解すればよいのかという点は、まだまったく明らかにされてはいません。これこそが、ぼくらの本の最も重大な欠点だと、現在のぼくらは考えています[30]」。

このように『帝国』は多くの空白を抱え込んだ書であるが、だからこそ同時に開かれた書物であり、その豊富な問題提起を受け止めて考えることは私たち自身の仕事なのである。

（１）増田一夫「序　帝国の地平」、山内昌之・増田一夫・村田雄二郎編『帝国とは何か』岩波書店、1997年、2頁。

（２）同上、3頁。

（３）同上、6頁。

（４）平田雅博「序章　いまなぜ『帝国意識』か」、北川勝彦・平田雅博編『帝国意識の解剖学』世界思想社、1999年、14頁。

（５）Michael Hardt and Antonio Negri, *Empire*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 2000. 著者のネグリは、イタリアのパドゥア大学元教授（政治学）で、周知のように「赤い旅団」事件との関係を問われて現在はローマの刑務所に囚われている。共著者のハートは、アメリカのデューク大学助教授（文学）で、ネグリの著書の英訳者でもある。以下では、本書からの引用に際しては、引用文の後に頁数のみを記す。

（６）Michel Foucault, *Histoire de la sexualité 1. La volonté de savoir*, Paris: Éditions Gallimard, 1976, p.184. 渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ　知への意志』新潮社、1986年、177頁。

（７）古矢旬『アメリカニズム――「普遍国家」のナショナリズム』東大出版会、2002年、i頁。

（８）同上、317頁。

（９）同上、307頁。

（10）同上、276頁。

（11）藤原帰一『デモクラシーの帝国』岩波新書、2002年、3頁。

（12）同上、201頁。

（13）Immanuel Wallerstein, *After Liberalism*, New York: The New Press, 1995, p.176. 松岡利道訳『アフター・リベラリズム』藤原書店、1997年、265頁。

（14）ibid., p.192. 邦訳、288頁。

（15）Wallerstein, *The End of the World as We Know It: Social Science for the Twenty-First Century*, Minneapolis: University of Minnesota Press, 1999, pp.74-5. 山下範久訳『新しい学』藤原書店、2000年、144頁。

（16）Saskia Sassen, *Losing Control? Sovereignty in an Age of Globalization*, New York: Columbia University Press, 1996, p.11. 伊豫谷登士翁訳『グローバリゼーションの時代』平凡社、1999年、59頁。

（17）ibid., p.6. 邦訳、54頁。

（18）cf. Jeremy Bentham, *The Panopticon Writings*, London: Verso, 1995, p.29.

（19）cf. Michel Foucault, *Surveiller et punir: naissance de la prison*, Paris: Gallimard, 1975. 田村俶訳『監獄の誕生――監視と処罰』新潮社、1977年。

（20）世界システム論における人種主義や「労働力のエスニック化」という論点については、植村邦彦『マルクスを読む』青土社、2001年、第5章「ナショナリズムと人種主義」を参照されたい。

（21）Wallerstein, *The Modern World-system* I, San Diego: Academic Press, 1974, p.67. 川北稔訳『近代世界システムⅠ』岩波書店、1981年、99頁。

（22）Samir Amin, *Le développement inégal: Essai sur les formes sociales du capitalisme périphèrique*, Paris: Les Éditions de Minuit, 1973, p.8. 西川潤訳『不均等発展』東洋経済新報社、1983年、5頁。

（23）平野千果子「フランス人の植民地問題をめぐる記憶」、三浦信孝編『普遍性か差異か』藤原書店、2001年、181頁。

（24）アントニオ・ネグリ『構成的権力』杉村昌昭・斉藤悦則訳、松籟社、1999年、参照。

（25）cf. Étienne Balibar, *Droit de cité: Culture et politique en démocratie*, Paris: Éditions de l'Aube, 1998. 松葉祥一訳『市民権の哲学』青土社、2000年。

（26）浅野俊哉「『帝国(Empire)』とスピノザ」、『現代思想』2001年7月号、85頁、参照。

（27）この点については、植村『マルクスを読む』第4章「プロレタリアートの国民性をめぐって」を参照されたい。

（28）杉村昌昭・栗原幸夫・矢部史郎「アントニオ・ネグリをめぐる鼎談」、『情況』2002年5月号、168頁。

（29）cf. Negri, *Marx au-delà de Marx: Cahiers de travail sur les "Grundrisse"*, traduit de l'italien par Roxane Silberman, Paris 1979, p.262.

（30）マイケル・ハート＋トーマス・ダム「主権、マルティテュード、絶対的なデモクラシー」水嶋一憲訳、『現代思想』2001年7月号、113頁。